

日本基督教団関東教区埼玉地区壮年部ニュース

埼玉・教会・壮年

NO. 8・9合併号 2010年2月発行

「これでいいのか？今の教会」

—教団50年データから10年先の姿を見る—

若者たちが消えた教会、子どもたちの元気なにぎわいが聞かれなくなった教会、お年寄りばかりが目立つ教会—。特に日本基督教団の教会に著しくみられる現象という。2008年に教団総会に報告された「教団50年データ」はそれを如実に物語っている。教団財政の逼迫、教会員の高齢化と働き盛りの信徒数の減少傾向は今後10年間は継続すると予測、「このままでは教団教会に明日はない」と教団自らが報告書の中で認めている。それに引き替え、福音系の教会は逆に伸びているという。これは米国でも同様な傾向にある。またカトリック教会も教団教会とは裏腹に増加傾向を見せている。

地区壮年部は昨年11月に、神奈川県大和市にある福音系のカンバーランド長老キリスト教会高座教会の松本 雅弘牧師をお招きして講演会を開催した。同教会は会員数が1500人。1日3回の礼拝を捧げている。同市にはやはり教会員が1500人を超えるペンテコステ派の大和カルバリーチャペルもある。お隣の韓国はプロテスタント教会が盛況。一つの教会だけで5万人の信徒を擁する教会もある。

埼玉地区壮年部機関紙の表紙を見て、いきなりセンセーショナルなキャッチコピーの見出しに驚愕したに違いない。地区壮年部は、これまで信仰継承に加え、社会や教会自体の高齢化の問題について主に取り組んできた。2009年は宣教150周年の記念すべき年。減り続ける信徒、伝道力が低下した教団教会の未来のあるべき姿を探り、元気を取り戻し、神様の栄光を表すにはいかにあるべきか。「地の塩」「世の光」である教会として、地域に、日本社会に証し続けたいと願う。悩める若者たちがいる。年間3万人を超える自殺者がいる。福音を求めている人々はたくさんいるのだ。

埼玉地区壮年部講演会 2009年11月29日(日)大宮教会

「4世代が喜び集う教会」を目指して

「牧師と信徒が共に担う相互牧会」

「小グループ活動で支え合う教会形成」

「居場所づくり・誰も独りぼっちにならない教会」

「地域へのオアシスの場の提供」

～カンバーランド長老教会高座教会の取り組み～

牧師 松本 雅弘

日本基督教団の教会としてスタート

「四世代が喜び集う教会を目指して」が今、私どもの教会のテーマになっている。高座教会は今年、2009年で62年の誕生日を迎えた。1947年に日本基督教団の教会としてスタートした。その意味ではこちらの大宮教会と近い関係にある。その後いろいろな事情があり、カンバーランド長老教会の群れに入った。カンバーランド長老教会は、2010年で宣教60周年記念を迎える群れだ。高座教会の一番最初の牧師は吉崎忠雄という先生だった。1957年に生島陸伸(みちのぶ)牧師が就任。その後、たくさんの方々がイエス様を信じて洗礼を受けて私たちの群れに加わった。私は22年前の1987年(昭和62年)、伝道師として遣わされた。生島先生を中心に、当時は生島先生以外に牧師が2人、私たち伝道師が2人、事務スタッフが2人の計7人のチームで牧会を始めた。

同じ世代の牧師3人で共同牧会を7年間

その後1994年に、生島先生が65歳の

時に定年退職し、そして開拓伝道で私どもの高座教会員のメンバー60人弱と共に派遣されて行った。

私はその時35歳で、私より10歳年上の先輩と、私より2～3歳年下の同じ世代の牧師3人で共同牧会を7年間した。その後、2002年から私が主任牧師となって現在に至っている。

最初にスライドで教会の様子を見ていただきたいと思う。3月の第2週に活動報告会をみんなでやる。礼拝後にみんなが集っているところで1年間を総括する活動報告を出す。それとは別に「こんな年だった」という確認をして恵みを数えて神様に感謝する。

昨年目標が「クリスチャン・シュワードシップに生きる」というテーマで、その報告会を持った。神様がたくさんの恵みを下さっているのだから、その恵みを私たちはどう感じ、どうやって宣教のために用いていくかを1年間通して考えた年だった。ここに主題聖句がある。詩編第34編9節の「味わい、見よ、主の恵み深さを」のテーマでこの1年間を過

ごした。特に2008年は私どものカンパリーランド長老教会の総会が日本で行われた。300人以上の海外からの兄弟姉妹が日本中会にきた。そのオープニングの記念礼拝を高座教会でした。シュワードシップバザーを9月第2週の土曜日13日にした。そこでみんなと協力してホットドッグを作ったりピザを焼いたりしながら収益を上げて、それを日本聾啞学校とか、国際飢餓対策機構とか、地域のいろいろな作業所に全額献金して少しでも地域のニーズに応えていきたいということで、毎年やっている集会だ。これは若い人たちの会で若枝会という学生、青年の人たちの集会である。

若者は幻を見、老人は夢を見る

「四世代が喜び集う教会」は、使徒言行録の第2章に、聖霊が下ってペンテコステの日に新しい共同体が誕生した時に、それぞれの言葉で福音を伝えた、イエス様の素晴らしさを語ったと、そうしたときに「酒に酔っているんじゃないか」という人もいた。そうじゃない。酒に酔っているのではなく、「ヨエルの預言が成就したのだ」とペトロが、その出来事の意味を解き明かした聖書の箇所がある。

14節以下【すると、ペトロは11人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。今は朝の9時ですから、この人たちは、あなた方が考えているように、酒に酔っているわけではありません。そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。『神は言われる。終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子

と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。わたしの僕やはしためにも、そのときには、わたしの霊を注ぐ』】とある。

ここを読んだときに、わたしの霊をすべての人に注ぐ、すると、あなたたちを基点として息子、娘、あなたたちより少し若い若者、それから老人というふうには、ちょうど4世代の人たちが幻を見たり、夢を語ったり、つまり生き生きし始める。聖霊が下ったときに、こういうことが起こるということを、ペトロは解き明かした。私たちは本当にブドウの木であるキリストにつながり続けることを通して、神様からの命が私たちの隅々にまで行き渡って、喜んで生き生きと信仰生活を歩める共同体になりたいなど、日頃から思っている。

4世代の人たちがいる

ちょうど、このみ言葉を通して、ああ、そうだ。私たちの教会には、幸いなことに、4世代の人たちがいる。この人たちが、私たちが、それぞれの年齢に応じて喜んで信仰生活を過ごして、地域の人たちに仕えていければ何と素晴らしいことかと、昨年「4世代が喜び集う教会」というテーマで私たちは取り組み始めた。

先ほど疋田先生が「パラダイムシフト」の話をしておられた。実は私たちの教会もいろいろなことがありまして、今の形、ある意味でパラダイムをシフトさせるような理由があった。そのことを話しながら今の教会の様子について紹介をしてみたい。

1987年に神学校を卒業して今の教会の伝道師として招聘され、翌年に按守を受けてその牧師になった。そして今に至ったが、7年間生島先生を中心に私たちはチームで牧会をしてきた。

牧会場の場、牧会する施設としての牧師館

15年前に生島先生が定年退職で、高座教会を離れていかれたときに、個人的なことだが、私たち夫婦は小学校1年生だったか、2年生になる子どもと学校に入る前の2人の子どもの合わせて3人を連れて、主任の牧師が住んでいた教会の中の牧師館に引っ越してきた。その牧師館は、家庭を開放して夫婦で牧会する生島先生にとっても、教会員にとっても、牧会がなされる場、牧会がなされる施設と呼んでもいいが、牧師もそう考えていたし、教会員もそう考えていた、そういう場所だった。そういう場所に私たちは引っ越してきた。

その牧師館は私自身とっても大変思い出深く、青年のころはよく出入りをして、先生からいろいろ教えていただいたり、カウンセリングを受けたり、同じ青年の仲間同士で本当にたくさん楽しい思い出が詰まった牧師館、何度も食事をいただいたりした何とも居心地の良かった場所、行きたい場所だった。そこに私たちは家族として、牧師としてそこに15年前に引っ越してきた。そこは大変日当たりが良くて、表から裏からどこからでも入ってこれるような牧師館で、私は今そこに住んでいる。生島先生が家庭を開放して教会員の人たちに仕えていくという意味ではすごく適していたが、私はそこに住み始めたとたんに睡眠が十分取れなくなってしまう。いつ、誰が訪問してくるか分からない状態で、それが牧師館なんでしょうけど。私は当時教会から歩いて20分ぐらいの所に借りて住んでいたの、食事に戻ったり、教会に引き返したりするそのひとは気分転換になる。教会で動いている時間のスピードと、牧師館に戻ったら家族と過ごす、ゆったりとしたスピードがある。ちょうど良かった。ところが、敷

地内にある牧師館に移ってきて、精神的にちょっと大変だなというときがあった。当たり前のことだが、牧師というのは24時間体制で、いつ人が来るか、いつ電話が鳴るか、いつも心の準備が求められる日々が続いた。

牧師が牧会する人、信徒は牧会される人

もともと高座教会の牧会の仕方がそうなのだ、私も教わってきたし、教会員もそう考えていたので、つまり「牧師が牧会する人」「信徒は牧会される人」、牧師は伝道する人という、そうしたはっきりとした役割分担があった。私の妻も本当に一生懸命訪問客を迎えて、当時よく私の家に、一つ和室があってそこに人が滞在できる部屋がある。そこに外国から来たお客様をもてなしたりすることをやった。牧師は牧会、伝道のプロなので、牧師がそれを全部できるように信徒の人たちも協力してくれた。なにしろ「牧師につなげるように」と、教会員の数が増えるに従って牧師の数も増やしていかななくてはならないというような牧会の体制を執っていた。15年前に生島先生が退職なさって、その後、3人の若い牧師たちが共同牧会を始めた。まさしく共同牧会で、説教の回数も3等分した。高座教会は、教会を中心に11の地区に分け、担当の長老がいるが、その地区もきれいに3等分した。その地区の葬儀はその地区担当の牧師が司式した。なにしろ3つに分けられるものはすべて3つに分けた牧会をしていた。その結果、責任の所在がはっきりしなかった。牧師の方は3つに分ければいいので分かりやすく良いかなと思ったが、信徒の方からすると、「私はアポロに」「私はパウロに」という具合に、教職を選ぶような誘惑が大きいシステムだったのではないかと、思っている。私

たち牧師にとっても、もっと正直な言い方を
するならば、少なくとも当時、私の心には他
の先生と競うような思いがあったことは否定
できないと思う。そんなある時、私の心に、
サムエル記上7章15節以下のみ言葉が響い
た。「サムエルは生涯、イスラエルのために裁
きを行った。毎年、ベテル、ギルガル、ミツ
バを巡り歩き、それらの地でイスラエルのた
めに裁きを行い、ラマに戻った。そこには彼
の家があった。彼はそこでもイスラエルのた
めに裁きを行い、主のために祭壇を築いた」
とある。前任の先生に習って一生懸命家庭を
開放しての牧会、大勢の教会員のニーズを必
至になって応えていこうとする働き、他の先
生に遅れを取らないようにというような牧会、
もう朝から晩まで、必死になって場合によっ
ては家族を犠牲にしてさえも進めていくよう
なそうした牧会、家に戻ってきたらそこでも
電話が鳴る。そんな自分の姿と、ここ（聖書）
に出てくるサムエルの姿と重なって見えた。
サムエルは一生の間イスラエルを裁いた。ベ
テル、ギルガル、ミツバ～ベテル、ギルガル、
ミツバ、たまにラマに戻った。そこに彼の家
があったからだ、という感じで、これを読ん
だときにサムエルは一生の間イスラエルを裁
いたが、果たして私は最後まで勤まるだろ
うか。本当に思った。その意味で私自身、牧師
自身が行き詰まりを覚えて、そして他の先生
たちも同じ思いだったのではないか。新しい
任地を求めて他の2人の先生は派遣されて行
った。

新しい牧会へと仕組みを変えていく

最後、疲れを覚えていた私が残って、信徒
の皆さんはそこにいらっしゃる。礼拝出席は
その当時、400名少し。教会員の数は10

00人ぐらいだった。牧師の資格のある私と、
それから長老とがどのように皆さんのお世話
をしていったらいいのか、当然パラダイムの
シフトをしなければ対応し切れない状況にあ
った。それが今、私たちの高座教会が実施し
ている新しい牧会へと仕組みを変えていくき
っかけになったのではないかと思っている。
ダビデがゴリアテと戦うときにサウロの鎧を
借りた。重くて上手くいかなかった。そこで
彼は川辺に行つて滑らかな5つの石を拾った
（サムエル記上17章）と書いてある。ちょ
っと、これじゃあ重いので上手く対応できな
いので、私たちもみんなでもう一度、滑ら
かな5つの石を拾わなくちゃいけないんじゃ
ないか、と思わされた。それで今ここ7年を掛
けて、長老たちとリーダーたちと一緒に考え
ながら、どうやってこの教会の人たちを支え
つつ、なおかつ神様から託されているミッシ
ョン（宣教の使命）を、その地域で果たして
いけるかを考え、今もいろいろ試行錯誤しな
がら進めているのが私たちの高座教会の今の
状況だ。

「教会って何なのか」を学び始めた

私が主任になって最初にしたことの一つは
何かというと、日曜日の礼拝でエフェソの信
徒への手紙からもう一度みんなで「教会って
何なのか」を学び始めた。数年掛けて、礼拝
の中で学び始めた。その中で心にとまった一
つの聖句があった。そのことをみんなで確認
した。エフェソの信徒への手紙4章11節か
ら13節のみ言葉だ。「ある人を使徒、ある人
を預言者、ある人を福音宣教者、ある人を牧
者、教師とされたのです。こうして、聖なる
者たちは奉仕に適した者とされ、キリストの
体を造り上げてゆき、ついには、わたしたち

は皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ち溢れる豊かさになるまで成長するのです」と、こうある。

「ちょっと逆じゃないか」

今まで「牧師が伝道する人」、「牧師が牧会する人」。信徒は、それこそスタジアムの観客席に座って、牧師がグラウンドに降りて一生懸命プレーする。上手くいくとみんなで拍手して「いいぞ、いいぞ」と言ってくれる。応援して下さる。失敗すると、「ブー」と言って観客席からいろいろ評価される。この聖書の個所を見ると、ちょっと逆じゃないかと、むしろ観客席に座っている教会員の皆さんにぜひ、グラウンドに降りてきて下って一緒にプレーしよう。その一人一人がそれぞれに与えられている賜物を十分に発揮してプレーできるように、とことん仕えるのが牧師の役目なのだ。それこそパラダイムシフトを迫られるような聖書の個所だったのだ。聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせるために、牧師しかできないことは何だろうかを考え始めた。牧師しかできないことは牧師がしなければならぬが、牧師じゃなくともできることについては、むしろ聖徒、教会の人たちみんなでカバーしていく働きなのだ、ということを経験者たち、リーダーの人たち、教会全体で確認した。

互いにケアできる態勢

カンバーランド長老教会の信仰告白があるが、それを見ると牧師のことを何て定義しているかという、「み言葉と聖礼典に仕える者」と定義している。つまり牧師の務めというのは、説教と聖礼典の執行、そのために召されている。そのことを通して信徒の方たち

にとことん仕えていく。それ以外の働きのことは全部牧師が抱えてしまうのではなくて、むしろみんなで共有して、協力しながら進めていく働きなのだ、ということであらためて私だけじゃなくて教会員みんなを確認した。この結果、私たちの教会は、「牧師は牧会する人」「教会員は牧会される人」という従来の牧会の在り方をもう一度見直して、牧師も教会員もお互い牧会し合う「相互牧会」を目指していこう、ということに切り換えた。具体的に何をしたかという、意識して小さなグループをたくさんつくった。小グループをつくった。そして互いにケアできる態勢をつくった。それだけじゃなく、一人の人が一人一人がケアできる範囲、出エジプト記18章12～18に、エトロという人がモーセに忠告している。

「モーセのしゅうとエトロは焼き尽くす献げ物と生贄を神にささげた。アロンとイスラエルの長老たちも皆来て、モーセの舅と共に神の御前で食事をした。

翌日になって、モーセは座に着いて民を裁いたが、民は朝から晩までモーセの裁きを待つて並んできた。モーセのしゅうとは、彼が民のために行っているすべてのことを見て、『あなたが民のためにしているこのやり方はどうしたことか。なぜ、あなた一人だけが座に着いて、民は朝から晩まであなたの裁きを待つて並んでいるのか』と訪ねた。一中略一モーセのしゅうとは言った。『あなたのやり方は良くない。あなた自身も、あなたを訪ねてくる民も、きっと疲れ果ててしまうだろう。このやり方ではあなたの荷が重すぎて、一人では負いきれないからだ』

小グループ、居場所づくり、世話役…

それで、リーダーを立てて、牧会の範囲を決めて誰も自分のキャパシティを超えて牧会したりすることがないように、ここでエトロは助言した。これを私たちの教会に当てはめてみようということで、ケアの範囲を定めて、それ以上はオーバーワークにならないようにした。何しろ小さなグループをたくさんつくって、居場所をつくって、そこに世話役を立てた。世話役は大変な働きだから、今度は世話役をサポートする**信徒リーダー**、これは長老の働きだが、当時は18人、現在は12人に変えた長老だが、長老だけではカバーし切れないので信徒リーダーに立ってもらった。これで小グループの世話役をサポートする。その信徒リーダーを牧師とスタッフがケアするという牧会の仕組みをつくった。

「誰も独りぼっちにならない教会」を目指していこうということで今、小グループづくりに励んでいる。まだ牧師の駆け出しのころ何人かの長老とボンフェッファーの「説教と牧会」という本の読書会をした。その中で牧会というのは、「主の日に語られた説教を個々に適応する働きだ」定義されていた。小グループの中でまさに主の日に語られた説教もしくは日々の聖書のみ言葉、祈りの時を通して与えられたみ言葉を互いに分かち合うような形で、小グループを持って、そしてお互いの課題について祈り合って、何かあったときに本当に支え合っていけるようにと、そうした小グループ活動をしている。

このように、少しずつ仕組みを変えるように、「滑らかな5つの石とは何なのか」、「私たちの今の教会にとって、そうしたものは何なのか」と、牧師と長老が一緒になって祈り求めながら今の教会の形を少しずつ変えてきた。

大切な3つの使命

私は聖書を読んでいて、神様が私たち教会に与えて下さっている大切な3つの使命があると思っている。マルコによる福音書12章28節以下のみ言葉だ。ある人がイエス様に「律法の中で一番大事なものは何ですか」と訪ねたら「**神を愛し、隣人を愛しなさい**」とイエス様は答えた。例えば律法がドアだとすると、ちょうつがいのような大切な二つの戒めだ。それで全部律法が押さえられている。「神を愛し、隣人を愛しなさい」というのは、どの時代の教会も、どの地域の教会も、どの教派の教会もクリスチャンであるならばこのことを受けてしっかりと立たなければならぬのではないか。二つ目は、ヨハネによる福音書13章34～35節。あの十字架にお架かりになる前の日にイエス様が弟子たちと共に過ごす、そのときに「**あなた方に新しい掟を与える。あなたがたは、互いに愛し合いなさい**」とおっしゃった。何をもって新しいとするかということ、神を愛し、隣人を愛するというずっと昔からある戒めに加えて、クリスチャン同士が、弟子同士が互いに愛し合いなさいと、おっしゃったそれが新しい掟なのだ。これもクリスチャンなら受けて立たなければならぬイエス様からの大切な教えだと思った。三つ目は、きょう、疋田先生がお話下さったマタイによる福音書28章19～20節。「**弟子にしなさい**」というところだ。あそこは全世界に出て行ってつくられたすべての人に福音を伝えなさい。父子聖霊の御名によって洗礼を受けなさい。私から聞いたことを守るように教えなさい。教えるとか、洗礼を受けるとか、出て行って福音を伝えるとか、すべて分詞型で書かれている。主動詞は「弟子にしなさい」だ。出て行くことも教え

ることも洗礼を授けることも、どこに集約されるかという、一人一人がキリストの弟子になっていくというところに集約されていく。そこにフォーカスしていくこと。これをあらためて知らされた。

余談だが、私は牧師として毎週、説教を語るが、この聖書の言葉を読んで「ハッと」したことがあった。マタイによる福音書28章20節―「あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」―。これをよく読むと「守るように教えなさい」とイエス様は言う。「聖書を教えなさい」ではなく、「信徒の人たちがそのみ言葉を守るように、み言葉を生きるように説教しなさい」と、私には聞こえてきた。み言葉と聖礼典に仕える牧師として召された私の課題の一つは、信徒の皆さんがみ言葉を守るように聴いていただけるかどうか、またみ言葉を生きるように解き明かしているかどうかについて、それ以降、関心を持つようになった。この3つの神様から教会に与えられている大切な命令は、キリスト教会と名の付く共同体にとっては、どの時代も、どの地域も、どの教派も、このことを私たちはどう受け止めて、どう具体的にしていくかはそれぞれに託されている課題なのではないかと、私は思う。これを私たちの教会で考えていろいろ分析し、各会の代表に集まって中長期の計画を数年前に立てた。今の高座教会の現状をみんなで分析して「3つの目指すもの」をつくった。

温かく小さな群れで成長する共同体

目指すものの第1は、「温かく小さな群れによって成長する契約共同体の実現」。この話の中で「高座教会は冷たい」という。じゃあ、温かい言葉を入れようということで「温かく」

という言葉が入った。少し人数が増えてきたので、大きいということがものすごいマイナスに作用している部分がある。そこで「小さい」という言葉を入れた。温かく、小さな群れによって一人一人が成長していく、あるいは群れ全体も成熟していく、そうした教会、契約共同体の実現を目指そうとした。これはまさに先ほどのヨハネの13章34、35節の「互いに愛し合いなさい」というその言葉を私たちの群れに当てはめると、こういう言葉をもって表現していこう。このことを目指していこうと考えた。

主を信じる人で溢れる地域社会の実現

目指すものの2は、先ほどの「弟子としなさい」とリンクするが、「イエス・キリストを信じる人で溢れる地域社会の実現」。すごい大きなテーマだが、みんなで考えた。

「隣人を愛しなさい」

3つ目は、「隣人を愛しなさい」である。イエス様は「水がほしい」という人に水を提供する。そのことが必ずしも伝道に結び付かなくとも本当に人間として、人間らしく生きるため、さまざまなニーズに応じていくことも教会の使命だということで「地域へのオアシスの場の提供の実現」を掲げた。

「信仰生活の5つの基本」

これが私たちの教会の目指す3本柱になる。その土台にある部分を「信仰生活の5つの基本」という形で私たちは大切にしている。これは前任の生島先生が、退任なさるときに「高座教会が大切にしてきたもの」と題してお話し下さったものだ。この中で4つのことを話された。1番目は「伝道」、2番目は「集会」

3番目を2つに分けて「聖書を読むこと」と「祈ること」と教えてくれた。最後の5番目は「奉仕」だった。み言葉と祈りというのは呼吸みたいなもので、これを一つにして、ぜひ「主にある交わり、小グループ」を入れたいので開いた4番目に「聖書と祈り」を一つにして、「主にある交わりに生きる」という項目を私が先生に相談せず独自に入れてしまった。先ほど読んだ使徒言行録のペトロの説教の後、あの出来事のあと誕生した初代教会の姿の中にこうしたものが入っている。私たちも信仰の土台として大事にしていきたいなど考えた。これを今、私たちの教会の信仰生活の土台にして、その上に先ほどの目指すものを柱にして教会形成をしていくことにした。

昨年はクリスチャン・シュワードシップに生きる、この信仰生活に生きる5つの基本の5番目を1年間のテーマとして掲げてきた。実はその前の年は「主にある交わりに生きる」だった。今年2009年は、去年が5番目だったので1サイクルを終わってまた1番目に戻って「キリストを知り、キリストを伝える」という宣教のテーマでこの1年間過ごしている。この5つを毎年一つ一つ教会のテーマに掲げて土台を5年サイクルで進めながら教会形成をしている。これを絵の形にすると信仰生活の5つの基本を土台に、高座教会が目指す3つの柱に4世代が喜び集う教会形成をしていこうというこんな絵を描いている。

「ワード」「ワーシップ」「ウエルカム」「ワーク」

ここで小グループの様子を去年の活動報告会で皆さんに見せたスライドをご覧に入れる。これは書道グループだ。一時期、教会の方でこういう形でグループをつくったらどうかと、皆さんに集まってもらって勉強会をし

ていくつかのグループに分けた。ところが教会から提供する小グループに皆さん、なかなか参加しなくなった。私たち職員、スタッフで研修会をして、どうしようかと思案した。最近、地域でプロポーザーウォーシーといって「この指とまれ」みたいな形でやりますね。リース型小グループをつくろうと、「書道やりたい人、この指とまれ」「料理がしたい人、この指とまれ」という形でグループを始めたら今、120くらいのグループができた。このグループの中では必ず4つのこと「4W」というが、「ワード」「ワーシップ」「ウエルカム」「ワーク」を落とさずにやる。三味線を練習する。この「ワーク」の部分が三味線を練習するということなのだが、必ず三味線のグループではユージー・ピーターソンの「詩編(祈る)」という本をみんなで読みながら、お祈りして始めたりしている。このような形で小グループ活動を始めている。2007年度が「主にある交わりに生きる」というテーマでやった年だったので、その報告会で小グループ「習字クラブ」として書いた。私の父も入っている。

これは壮年会の様子。これはボーイスカウト、ガールスカウトの様子。これはジョイジョイキャンプ。私たちの教会は昔はたくさん子どもたちがいたが、今は少し少なくなってきている。少しじゃない。かなり少なくなっている。夏に、以前は1学年ごとに教会に泊まってキャンプをした。今は何学年か合同でキャンプをする。教会に幼稚園があり、敷地の中でキャンプファイヤーをやる。これは成人式。教会から離れている子が多いのだが、この日1月第2週の日曜日にお招きして聖書のプレゼントをする。これは教会祈祷会。普段の日曜日の礼拝は「賛美歌21」を使って

非常にリタージカルな礼拝だが、ほかの諸集会については、少し自由に讃美もギターを使ったりしながらいろんな讃美を取り入れようと考えている。これは研修会の様子。それから、これは「タンポポ」といって幼稚園就園前のお母さんと子どもたちのサークルがある。今、お母さんと子どもたち100人ぐらいが集まっている。月に2回、第1と第3の木曜日。この子たちの中から私たちの教会幼稚園であるみどり幼稚園につながっている。

中国語、スペイン語、カンボジア語…

うちの教会には中国人など外国人の方々が集っている。中国語、スペイン語、カンボジア語、ポルトガル語の各グループが私たちの教会の施設を使って日曜日の午後、オープンしてそれぞれ礼拝を守っている。クリスマスにはその人たちと一緒に国際交流をしている。

このあたりから小グループ。「手話クラブ野菊」、外のジムでの「ボクシングクラブ」もある。「ウクレレクラブ」、「シネマクラブ」では教会で映画の上映会をして上映後、感想を語り合っている。「食べ研」は、アトピーの子どもを持つ親御さんが多く、その人たちが集まっているいろいろな食べ物について研究しているグループだ。「小グループ男の料理」は、レストランをやっていたシェフがいて月に1回、ハンバーグなどをつくってみんなで食べて楽しんでいる。「はるなのパン教室」は、はるなちゃんがパンを作るのが好きで彼女を中心としたグループ。畑作りの小グループは、ある人が畑を借りてみんなでお芋をつくったり、収穫があるとみんなで食べたりしている。ほかに「囲碁クラブ」などなど。

牧師が牧会する人、信徒は牧会される人—というパラダイムをシフトしようということ

で具体的に何をしたかということ、**小グループからなる教会形成**をしようとして進めていることがまず一点。2つ目は、「居場所づくり」。神様と教会、神様とクリスチヤンの関係を例えば「父と子」、「主と僕」という言い方が聖書の中でなされている。特に「主と僕」、「主と弟子」というのは、使命を媒体とした関係なので、必ず一人一人に与えられている賜物がある。その賜物を見つけて、その賜物を用いて教会の中で奉仕できるように、いわゆる普通の小グループと共に、「**奉仕の小グループ**」にも入るよう教会員にお薦めしている。

4月と10月に新来者歓迎礼拝

具体的な方策の3は、**信仰生活をサポートする機会の提供**として教会に接点がある人に伝道を目的とした集会に導くようにしている。ここに定着したら今度は礼拝にもお誘いしよう。礼拝は4月と10月に新来者歓迎礼拝をしている。そこにお招きする。その中から洗礼準備会へと導いていく。2002年から昨年まで197人の人が導かれた。以前は洗礼を受けるとここでお終いであったが、成熟へと目指してこの後のプログラムを充実させた。洗礼前、勉強会を8回やるが、洗礼式の後、同じメンバーと毎週、これも8回受洗後勉強会をやる。「信仰生活5つの基本」と「高座教会の3つのめざすもの」、5プラス3の合わせて8回、教会で大切にしていることを話す機会を持っている。ここのグループが一つの小グループになって新しいリーダーの下に「**受洗後の祈り会**」を月に1回のペースで開いていく。あと、**宣教への参加**ということで行くプログラムの用意している。

「規模にそくした教会形成」

次に「規模にそくした教会形成」を私たちの教会では考えている。小グループに導くテキストとして「小グループで教会は変わる」を使用。「細部別に分析する教会形成の方策」がある。私がこの3月に翻訳したもので、牧師の役割も教会の規模によって違うことなどが書かれている。これを参考にしながらなるべく組織についてもリーダーシップについてもスタッフの考え方についても牧師の役割についても右の方に行くよう考えながら規模に合った形の、「新しい葡萄酒は新しい皮袋に」という具合に長老たちと一緒に考えている。

今お話したことをまとめると、高座教会ではヨハネによる福音書15章5節のみ言葉をよく説教の中で引用する。「わたしはブドウの木、あなた方はその枝である」。私たちはブドウの木につながれば必ず実を結ぶ。木につながれば実を結ぶ。離れては何もできないとイエス様は言われる。その木へのつながり方が信仰生活の5つの基本なんだ。聖書を読ん

で祈る。礼拝に出る。小グループで支え合う。それがブドウの木であるイエス様につながる事なんだと、みんなで励まし合っている。それから「居場所づくり」、「教会員の信仰をサポートする学びの機会の提供」、「規模にそくした組織づくり」、「牧師の役割を明確にしてそれ以外はみんなで協力し合った働きをしよう」ということなどを大事にしてきた。

「あなたへの3つの質問」

最後に電車の中で考えてきた「あなたへの3つの質問」を用意した。10年後、5年後、3年後でもいいが、5年後にすべての祈りがかなうとしたらあなたはどのような教会（礼拝共同体）の姿を描きますか。神様がそのためにあなたに望んでおられる次のステップは何でしょうか。そのためにきょうからできることは何でしょうか。これをヒントに今、私たちが遣わされている持ち場持ち場で少しでも神様のご期待に沿う歩みができていったら素晴らしいなあと思う。

カンバーランド長老教会とは（高座教会のHPから）

起源は、19世紀初頭、米国のカンバーランド地方と呼ばれたケンタッキー州とテネシー州の両州で起こった信仰復興運動（リバイバル）にある。信条と教会政治で伝統的な長老教会の特質を継承しているが、中庸の神学を受け入れているという意味で、特徴のある教義を持つ。人間の救いの教義はカルヴァン主義でもアルミニウス主義でもなく、中間の立場を取る。具体的には教会設立時に①永遠の遺棄はない②キリストはある一部の人のためにではなく、全人類のために死なれた③幼くして死んだ者は皆、キリストにより、また御霊の聖（きよ）めによって救われている④神の御霊はキリストの成し遂げた贖罪の及ぶ範囲、即ち全世界において働いている。それゆえ、あらゆる人に弁解の余地はない—の4点においてカルヴァン主義の色彩の強いウエストミンスター信仰告白を改訂した。その後、極端なカルヴィニズムから完全に離れた神学を明瞭にすべく独自の信仰告白を1883年に制定。さらにその1世紀後の1984年版信仰告白を採択した。この信仰告白はヨハネによる福音書3章16節「神はその独り子をお与えになったほどに…」に見られる聖書的骨格に沿って構成されている。

1950年に日本基督教団を離れ、77年に日本中会を設立。本部は米国テネシー州メンフィス。香港、コロンビア、リベリアに中会を持つ。日本国内には東京、千葉、神奈川の3都県に計13教会を擁する。

埼玉地区壮年部講演会 2009年11月29日(日) 大宮教会

第1部 開会礼拝

「現代に合った伝道パラダイム(方策・方針)の転換」

「すべての民を私の弟子にきなさい、という大宣教命令」

「弟子になるとはイエス様の後に従っていくこと」

「自分の命と生活と賜物を主の前に…」

前回の地区壮年部修養会で「教団50年データ」のCDを見て皆さんショックを受けられたのではないかと思います。これから私たちの教団の教会はどうなるのだろうか、どうしていったらいいのだろうか。私はCDを4回も見た。その中で私たちはどんな可能性を見出していったらいいのだろうか。その時、皆さんが感じたように、私たちのこれからの宣教の方策とか、方針をどのようにしていったらいいのか、その宣教の方策とか、方針というのがパラダイムという聞き慣れない言葉の意味なのだ。最近、そういうたぐいの本「宣教のパラダイム転換」を読んだ。宣教の方針、方策の転換という意味になる。

韓国教会で弟子訓練セミナーに参加

私が初めて「パラダイム」という言葉を聞いたのは今から15年前、韓国の教会で、教職者の弟子訓練セミナーに参加したときだった。その時に弟子訓練の指導者だったある牧師の言葉が印象的だった。プロテスタント教会は、中世のカトリックの時代、その考え方に対して「聖書の教えに立ち返るように」と改革したマルチン・ルターの宗教改革により

大宮教会 疋田 國磨呂牧師

成り立っている。以来、正しい聖書の教義がどうということかという点が強調されその聖書の教義に基づいて教会形成がなされてきた。

価値観の多様性の中での伝道

今日の世界状況は全く異なっている。むしろ今日の状況は初代教会のように多様な価値観の世界である。そうした価値観の多様性の中で、キリストの伝道をどう進めるか、というパラダイムの転換が必要だ、と語ったのだ。最近「50年データ」を見て皆さんが戸惑っている。じゃあ、私たちの教団、教会はどんな宣教方策をしていったらいいのか、その宣教方策とか私たちの教会の宣教の在り方が即ちパラダイムが意味しているものであって、その結果が教団に、各個教会に問われていることになる。

ルカによる福音書によると、イエス様がメシアであることを自覚して立ったのが30歳の時。それから3年間、12人の弟子たちを選んで、弟子たちをそばに置いて教え、宣教活動に、そして癒しのために遣わす、派遣する、さまざまな悪霊からの癒しの権限を与えるために12人を選んだということがマルコ

の福音書の3章に書かれている。そして33歳でイエスさまが十字架に架かって亡くなり、墓に葬られ、3日目に復活されて多くの弟子たちに現れて、やがて40日後に天の神様のもとに帰られた。それから10日後にペンテコステが起きるということが使徒言行録から分かる。イエスさまが弟子たちを集めて訓練し、遣わし、また癒しの権限を与えられた3年ほどの時代が終えて、そして全人類の贖いのために十字架の犠牲になられて、墓に葬られて復活された。その出来事が起こってからマタイの福音書、あるいはルカの福音書が書かれたのはだいたい80年ごろだと言われている。イエスさまが天に昇られてからマタイ、ルカの福音書が書かれたころまでに約半世紀、50年間の間隔がある。私が学んだことはマタイが半世紀、50年間たったマタイの教会をどのように築き上げていったらいいだろうか、ということでマタイはイエス様の最初の弟子たちの時から50年後のマタイの教会の間に一つの方策転換をマタイなりに見出しているということが分かった。そこにかかわる問題が今の私たちの伝道方策転換にどう問われていくのかということだが、いつも私は、マタイによる福音書の一番最後の28章16節から20節をよく引く。19節に「あなた方は行ってすべての民を私の弟子にきなさい」という大宣教命令が出ている。

注目されたのは1940年代

新約学者たちが調べたところによると、16節の大宣教命令は長い間、新約学者にはあまり興味が持たれなかった。この場所が本当に注目されたのは1940年代で、ミシェルとローマイヤーという新約学者によってだった。その意味で今、私たちは「あなた方は行

ってすべての民を私の弟子にきなさい」の御言葉は、復活されたイエス様の宣教命令として当然のこととして受け止めるべきだが、新約学者の間では長い間注目されなかった。

どうして注目されるようになったのかと言えば、イエス様の十字架と復活の出来事に出会い、キリスト教会はユダヤ人よりも異邦人、やがて70年、あのエルサレムの神殿がローマによって破壊され、そこでローマとユダヤ人たちによるユダヤ戦争が起きて彼らは滅ぼされてしまう。それからさらに30年ほどたっており、パリサイ派的ユダヤ教、律法的なユダヤ教は、キリスト教共同体に対してますます激しい否定的な立場を取るようになる。しかし、マタイ自身の共同体としては依然として大多数はユダヤ人であった。彼らは最早エルサレムは崩壊し、その国を追い出されて、そこに住めないでシリアの片隅で生活するようになる。彼らはキリスト教会としての過渡的な共同体であり、同国人からは拒絶され、自分たちのアイデンティティ、自己確立ができていなかった。彼らの中には熱狂主義者たち、律法主義者たちがおり、そして中間の人たちがいた。おそらく両者の中間的な人たちが主体となってマタイの教会が形成されていた。

ナザレのイエスを描き出した

この共同体のアイデンティティ、自分たちの在り方を確立するために、マタイは何をしたかということ、伝承に基づいてナザレのイエスを描き出した。あのナザレで教えられたイエス様を描く。マタイは自分の共同体のアイデンティティを最初から最後までユダヤ人と異邦人に宣教するという概念を持って福音書を書くことによって自分の教団、教会を確立

していった。

ユダヤ人にも異邦人にも宣教する教会

マタイの教会はユダヤ人にも異邦人にも宣教する教会として大宣教命令が記されることによってマタイの教会の自分たちの在り方、パラダイムをここに形成していった。その中で弟子にしない場合というのは、弟子にしないという大宣教命令の中心的な動詞だ。弟子にしないということとはイコール、バプテスマを授けるということと、教えなさいという二つの分子に分かれている。

宣教命令の「弟子にしない」ということの意味的なことは、父と子と聖霊の名によってバプテスマを授けなさい。もう一つはイエス様が教えていたことはすべて教えるようにしなさい。それから弟子にすることである。マタイは共同体の中にいる熱狂主義者たち、律法主義者たちの両方がいる中で彼らが取った指針は「弟子にしない」という冷静な指示を自分たちの教会のパラダイム、方針にしていたようだ。弟子にするという言葉は、マタイによる福音書の中心であり、マタイの教会の宣教理解の中心になる言葉である。「弟子」はマタイにおいて73回、マルコにおいては46回、ルカでは37回、多くは後に従う、弟子になるとか、弟子にするというのはイエス様のあとに従っていく、というような具体的な行動が伴うように、言葉には意味がある。

最初の弟子の教会はマタイの教会の原型

マタイにとって弟子というのは十二弟子だけを指すのではない。マタイにとって最初の弟子たち、十二人プラスアルファだと思うが、イエス様がいたときの最初の弟子たちの教会はマタイの教会の原型であった。マタイが弟

子と言うときには、マタイ時代の弟子たち、福音書ではマタイ以外の弟子たちをも含むように拡大されている。イエス様の時代とマタイの時代の教会、50年間の間隔があるが、弟子にしないという命令によって、その関係が示され、マタイはマタイの教会の最初の弟子たちのように、私たちが弟子になろう、弟子にしよう、とって教会形成をしてきた。

熱狂主義者たちにも引っ張られず、旧約聖書の律法主義者たちにも引っ張られず、私たちの教会はすべての民を弟子にしよう、というのがマタイの教会の伝道方針だった。弟子にするということは最初の弟子たちのように、私たちが周りの人々を最初の弟子たちのようにイエス様に従っていきこうというのがマタイの教会の基本方針だった。私はこのことを現代の教会にどのように問うていったらいいか。

私たちは弟子になっているだろうか

私たちは教会でたくさんの御言葉を学ぶ。修養会などでたくさん学習をする。だけど、本当に私たちはマタイが言っているように最初の弟子たちのように。また、弟子となるように導いているだろうか。弟子になるということはイエス様の後に従っていくことなのだ。行動が伴う。イエス様が愛されたように私たちが愛する。イエス様が癒されたように私たちが癒す。イエス様が訪ねられたように私たちが訪ねる。私はこのことを今回の学びを通して自分自身の牧師としての牧会の姿勢として問われた。ICUの教授であられた古屋安雄先生がキリスト新聞に、私たち日本の教会の今日の問題はキリストの贖い信仰に留まってしまっていないだろうか、と指摘されていた。私たちの罪は許された。ありがたや、ありがたや、とってそれで満足してしまっ

ていないだろうか。贖われたということは罪が許されて、マタイの方針で言えば弟子にされるということなのだ。自分は弟子にされたという自覚があって初めてイエス様のように愛し、訪ね、癒しの人として動きが出てくることなのだ。ですから今日私たち日本基督教団に問われていることは、みんなイエス様を信じている。救われている。その救われた私たちがどのようにイエス様のように生きることができるか、ということが日々の生活の中に具体的に問われていることなのだ。そのようなことがこの間、宣教150周年記念伝道大会で加藤常昭先生がおっしゃられた。

課題の前に共に立っていく

高齢化、高齢化とって私たちは嘆いているけれど、その高齢者たちの傍らに私たちは沿って立っているだろうか。そこで共に歩んでいくなればそこにやはり恵みと救いを共有していくことができるのではないか、という趣旨のことを言われていた。嘆く課題は嘆きのままでなくしてその課題の前に私たちがイエス様の弟子になってイエス様が言われたように、イエス様が祈られたように、イエス様が訪ねられたように、イエス様が癒されたように私たちがその課題の前に共に立っていく。これが私たち一人一人に問われている。

弟子訓練とは何かというと、イエス様にどうしたら従っていけるかを私たちが具体的に学ぶ信徒の訓練なのだ。私も長い間牧師をやりながら弟子訓練をここ10年意識の中心に据えている。それまでは弟子とは十二人のことだと思っていた。マタイはそうではない。信者をみんな弟子にしよう。しなさいというのがマタイの福音書の伝道基本方針なのだ。

そのことは信じているだけでなくして私たちが最初の弟子たちのようにイエス様が言われたように私たちが歩んでいく。そういう生活を私たちがしていくならば今、この世で悩んで悶々としている人たちの傍らに立つことができる。最近、日本が自殺者が年間3万人を超えているという。1日100人ずつ自殺している私たちの国なのだ。この人たちが、今イエス様がここにおられたら飼い主の失った羊たちのようにさまよっているその姿を大変哀れまれて働き人を送りなさい。そういうに違いない。誰が働き人になるのか。普通、今までだと先生方、牧師、伝道師と考えられていた。マタイが弟子にしなさいといていたときの働き人は誰か。私たち一人一人なのだ。

「主よ、お用い下さい」

イエス様を救い主として信じている私たちが「主よ、お用い下さい」といって、自分の命と生活と賜物を捧げて行くときに私たちが主に用いられていくのではないだろうか。その意味で今まで牧師中心の教会形成、牧師中心の伝道という感覚から牧師も信徒もみんな一緒になって弟子になっていく。そういう中の伝道方策を具体的に考えていかないと、先生に任せてしまっていたらだんだん先細りになっていく。マタイの教会のパラダイムはすべての民を弟子にしなさい。そしてあなたも弟子になりなさい。そのことが最後のマタイの大宣教命令の言葉の中に記されていることなのではないか。まず、自分が小さな弟子になって、「主よ、用いてください」と差し出して行くことによって始まっていくということがこの学びを通して示された。

埼玉地区壮年部修養会 日本基督教団 大宮教会 2009年7月19日(日)

主題テーマ「これでいいのか？今の教会」

副題「教団50年データから10年先の姿を見る」

第一部 開会礼拝

説教 「すべての民をわたしの弟子にきなさい」

大宮教会 疋田 國磨呂牧師

チャレンジングなテーマ

埼玉地区壮年部修養会の主題テーマ「これでいいのか？今の教会」は、大変これはチャレンジングなテーマだ。この後、皆さんと一緒に見る日本基督教団予算決算委員会が編集した「教団50年データ」—その分析と提言—の英知を受けたテーマかと思う。今、日本基督教団諸教会の教勢は、礼拝出席、祈祷会、受洗者の数、献金の金額が右下がりになりつつある。右上がりなのは、天に召される方々の数だ。受洗者の数より増えている。ということは、各教会の現住陪餐の数が減っているということだ。この間、開かれた関東教区143教会・伝道所の教勢は、2007年度までは関東教区は17教区の中にあって現状維持であったり、少し平均より上回るという状態だったが、2008年度は急激に教勢の数字が落ちてきた。例えば、現住陪餐会員がマイナス289人、礼拝出席者がマイナス64人、祈祷会がマイナス47人、受洗者がマイナス45人、経常収入に当たってはマイナス2155万2000円だ。地方教会の中堅教会が一つ、二つ消えていくような数字だ。埼玉地区を見ても前年度と比べると、財政的にも諸集会の出席を見ても減少気味である。こ

うした状況の中で私たちの教会は、「どうあるべきか」が今問われている。はからずしも今年プロテスタント宣教150周年の記念すべき年でもある。この地域だとやはり横浜に上陸した宣教師たちによって伝道が始まった教会が多いことだ。宣教師たちの蒔いた福音の種が150年たった今こうして実っていることを私たちは確認したいと思う。

互いに意見交換し祈り合う

私たちは宣教師たちの生涯を捧げた祈りを思い起こし、福音宣教に立ち上がりたいと願うものである。そのために教団50年データと分析を見て、どうしたらこの現状を乗り越えて福音宣教に奮い立つことができるかを求めて互いに意見交換をし、祈り合うことができらばと思う。私がきょう語る開会礼拝は、むしろ閉会礼拝で語った方がいいのではないかと思うようなメッセージになるかと思う。

エゼキエルを通じた神の言葉の意味

旧約聖書のエゼキエル書は、イスラエルの民がバビロンに捕囚になったその最中にこのケバル川の畔で神様がエゼキエルに語られたものだ。そこにはエルサレムの滅亡の預言が

なされ、また同時に諸外国に対する神の審判、それからイスラエルの回復、新しい神殿の幻などが語られている。このエゼキエルを通して語られた神様の言葉が何を意味するか、ということであらゆるイスラエルの歴史を垣間見たい。イスラエルの歴史の先祖はアブラハムだ。天地をつくられた神様はアブラハムをサランから導き出した。「あなたは生まれ故郷の父の家を離れ、わたしの示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高め、祝福の源となるようにと命じて、カナンの地に導いた。イサク、ヤコブの神となり、そうして12人のヤコブの子どもたちがイスラエル12部族を形成した。イスラエルの先祖アブラハムの登場は、紀元前2000年ごろだ。

エジプトに430年間滞在

神様はアブラハムを祝福の源として選び、そのイスラエルの民族を通して神のみ心と祝福を全人類に広めようとなさった。しかし、やがて飢饉が起こってヨセフの時にイスラエルの民たちはエジプトに入り、やがて430年間、彼らはそこに滞在する。しかし、ヨセフを知らない王が出てきてから、イスラエル民族はエジプトの奴隷として仕えるようになり、大変苦しむ。その叫ぶ声を聴いて神様は、モーセを誕生させ、モーセの80歳の時に、イスラエルからの脱出を、モーセを通して実施した。荒野の40年間の間にシナイ山で律法の基となる「十戒」を神様は授けられた。これが紀元前1500年ごろだ。神様は、モーセを通してイスラエルの民族をエジプトの奴隷から解放された主として十戒を与えるとともに、神様の御用に用いようとした。彼らはヨシュアによってカナンの地に入り、1

2部族に約束の血が分配された。士師としての指導者の歴史が400年続いた。やがて民たちは王様を求めてサウロが初代の王となった。第2代の王としてダビデが立てられ、イスラエルを統一した。これが紀元前1000年のことだ。しかし、ソロモンは神殿を完成させたが、晩年異国の女性をはべらすことによって異国の偶像の神々に惑わされるようになり、ソロモンは神様に背いた。神様はその背きに対してヨセフ族の労役全体の監督ヤロブアムによって背かせて王国を分裂させる。紀元前931年、サマリアを中心とする北王国イスラエルとエルサレムを中心とする南ユダとに分裂した。しかも分裂したそれぞれの王たちは、ほとんどが自分の父が犯したすべての罪を犯しその心も父祖ダビデの心のように神様、主と一つになることができない王たちであった神様は真の祝福に満ちた支配を表そうとしてイスラエルを選んだがソロモンによって王国が分裂し、そして王たちは神様に背き、父祖ダビデの神に対する心を失ってしまった。これに対して神様は裁かれる。

バビロンによる捕囚の民

紀元前723年、北王国イスラエルがアッシリアによって裁かれる。それから紀元前586年、南王国ユダはバビロンによって彼らは滅ぼされ、そして捕囚の民とされて連れ去られる。神様はご自身に背いた民たちに対してアッシリアやバビロンの大国を用いてその罪を裁き、ご自身が真の神であることに気付かせようとした。さらに神様は、しかし神様は民たちがイスラエルの家を「どうしてお前たちは死んでよいだろうか。わたしは誰の死をも喜ばない。お前たちは立ち返って生きよ。」と民たちが悔い改めて立ち返ることを切

に望まれる。そして民たちに哀れみを掛けて紀元538年、ペルシャの王キュロスを用いて捕囚の民たちを解放し、神殿再建を命じられた。紀元前538年第1回エルサレムの帰国が始まった。このときに帰還した人が1万4000人といわれている。この捕囚の民としたイスラエルを悔い改めて神に立ち返ることを望んで、そして彼らを帰国させた出来事はエズラ記やネヘミ記に記されており、またエゼキエルやハガイ書、ゼカリア書を通して預言の言葉がこうして望んだわけだ。

捕囚の身、エゼキエルの召命

エゼキエルは祭司の家に生まれた。紀元前597年、ユダがバビロンに降伏し、国の指導者及び技術者の多くの民たちが当時のヨヤキムとともに、バビロンに捕虜として連れて行かれた。これは第2回目の捕囚だった。その中に祭司エゼキエルもいた。彼はまだ20代半ばであったが、捕囚の身となって5年目、預言者として召命を受けた。ケバル川の湖畔、ビアブで自分の家を持ち、預言者として活動した。そして先ほど申したようにエルサレム滅亡の預言、諸外国に対する審判、イスラエルの回復、新しい神殿の幻を語る。捕囚の民である者達の中に偽預言者たちに惑わされてエジプトの援助に頼ろうとしたものがいた。しかし、エゼキエルはエルサレムの罪の故にその滅亡は避けられないことを宣言している。

イスラエル回復の預言

エルサレムがバビロンによって完全に滅ぼされたのはエゼキエルが捕虜となってから11年後、紀元前586年の8月だった。きょうのエゼキエル書の37章はイスラエルの回復の預言のひとつまでである。エゼキエルは主

の霊によって連れ出されて、ある谷のまん中に降ろされた。そこには骨がいっぱいだった。このエゼキエルの預言はバビロンに滅ぼされて捕囚となっているイスラエルの民たちに語られた言葉だ。

霊よ、四方から吹き来たれ

捕囚の民たちは、我々の骨は枯れた。我々の望みは失せ、我々は滅びると言って絶望的になっていた。希望を失った枯れた骨のようになっていたイスラエルの全家に対して主から託された言葉を彼は語る。「見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。するとお前たちは生き返る。霊よ、四方から吹き来たれ。霊よ、これらの殺されたものの上に吹きつけよ。そうすれば彼らは生き返る。」と告げるのである。絶望して枯れた骨のようになって人間を生き返らせて立ち上がらせることができるのは神の聖霊なのだ。この神の聖霊が希望を失っている者達に四方から吹き付けて人々を立ち上がらせ、聖霊を受けよと告げる、これがこのメッセージではないだろうか。

希望は神様の聖霊

今、これから教団50年のデータを見ると皆さんは絶望していくのではないかな、と思う。でも、私は前もって言うておく。そのようにして教団の教勢が右下がりになっていく、まあ、私たちはどうしたらいいのかと、もし思う中にそういう私たちを希望を持たせて、そして立ち上がらせることができるのは人間の知恵や力ではない。それは神様の聖霊なのだ。先ほど読んだマタイによる福音書がガリラヤに行けと、復活されたイエス様が弟子たちに告げたように彼らは、ガリラヤの山に行った。そこで復活のイエス様と出会うの

だ。でも、彼らの中に疑う者もいたと書いてある。しかし、イエス様はそのようにご自身を疑う者がいる中にも近寄ってきて言われた。わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だからあなた方は行って**すべての民をわたしの弟子にしなさい**。彼らに父と子と聖霊の名によってバプテスマを授け、あなた方に命じておいたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりまでいつもあなた方と共にいる。このように語られる。私たちの多少の不信仰はご承知で、主は大切な宣教命令をなされた。なぜこういうことができるのか。それはイエス様が約束されている。わたしに代わってあなたがたの助け主、あるいは弁護者としての聖霊を送ると、その方が来ればあなた方は罪を悟り、そして主のみ心を悟っていくと、おっしゃっている。約束されている。ですから多少、弟子たちが不信仰であってもそこにイエス様に代わって送られる聖霊なる神様が遣わされる時に、不信仰な私たちをも用いて神様は業をなされる、ということである。

「聖霊よ、来たり給え」と祈るとき

エゼキエルが四方から聖霊よ、吹き来たれと叫んでいる。今、私たちはペンテコステ、聖霊降臨を受けて、そしてすべての信じるもの達の上に聖霊が下っていることを知っている。今こそ、この私たちの時代に「聖霊よ、来たり給え」「私たち一人一人の上に働き給え」と、祈るときである。100年に1回の経済不況の中に私たちは置かれていて「ああ、捧げられない」と思っているかも知れない。あるいはどんだん高年齢者が増えて若者がいない。「ああ、私たちの教会はどうなるのかしらん」と、思っているかも知れない。

しかし、そのような、希望のないような私たちに聖霊が働くときに、あのイスラエルのために神殿を再建させたように、私たちを用いてキリストは教会を建て上げさせて下さるのである。共に礼拝を捧げて、共に祈り合う、このキリストの教会としての群れが建てあげられてくるところにこそ、まことの主がご臨在下さり、まことの主が希望を失った者達に希望を与えて立ち上がらせて下さるのではないのでしょうか。わたしは今、この時代にイエス・キリストに代わって私たちの助け主、弁護者として来て下さっている聖霊なる神様のご臨在、ご存在をしっかりと確認して、その助けをいただく時ではないのでしょうか。そうすれば神様は私たちの思いを超えた業を、それぞれの教会を通してなさしめて下さるといふことを、このエゼキエルは語り、またマタイによる福音書はそういう不信仰の者に対してもあなた方は行ってすべての民をわたしの弟子にしなさい、と命じておられるのだ。

万人祭司として前進するとき

今、この時代にあって私たちは一番聞かなければならないのは、すべての民をわたしの弟子にしなさい、ということではないのでしょうか。そのことに対して私たちは具体的にどのように考えるのか。「やあ、私たちはそんなことできない」「牧師先生お願いします」と言って、伝道者に頼ってくるのでしょうか。そうではなくしていまこそ万人祭司としての私たち一人一人が、そのすべての民を弟子にするために足を運び、呼び掛け、また祈り、そしてそこに聖霊なる神様が働いて下さることを信じて前進していく時ではないのでしょうか。

埼玉地区壮年部修養会 日本基督教団 大宮教会 2009年7月19日(日)

「子どもがいない。若者が消え、お年寄りばかり」

「危機的状況は今後10年間は継続という予測」

「このままでは教団教会に明日はない」

「求められる信仰的面倒見の良さ」

「教団50年データ」—分析と提言—

日本基督教団は、同教団に所属する全国すべての教会1730教会の最近50年間（おおむね1948年～2007年）における財務状況や現住陪餐会員数、受洗者数、教会員の年齢構成、教会（日曜）学校など多岐にわたる経年変化やその実態をまとめた。これは、2007年の全国財務委員長会議で「教団全体の財政について将来展望を示してほしい」との要望に基づき教団予算決算委員会が具体的な作業に当たり、その分析結果を2008年10月22日の第36回教団総会・協議会に報告したものだ。

受洗者数が召天者数に追いつかない

それによると、全教会の経常収入は最近7年間で5億7千万円、マイナス4・3%と教会財政は大きく落ち込み、教会員の数である現住陪餐会員数も92年から8248人、8・1%も減少、高齢化率は63%と、受洗者数が召天者数に追いつかないお年寄りばかりが目立つ教会という超高齢化構造が如実に現れている。教会（日曜）学校も中高科の存在さえない若者たちが消えた教会、子どもたちのにぎわいが聞こえない教会は数知れず…。この減少傾向の構図

は今後10年間にわたって継続、中堅規模の教区が一つ消滅すると予測している。「このままでは教団教会に明日はない」というほど信徒数が年々減り続ける危機的な状況が現れた極めて衝撃的な内容となっている。

2000年比5億7千万円のマイナス

まず、財務状況では全国すべての教会における経常収入で見ると、2000年では131億5千万円、これは2002年の132億5千万円をピークに、2007年が125億8千万円と2000年に比べ5億7千万円、マイナス4・3%となっている。

これを1教会当たりの平均値で見ると、経常収入727万円、経常支出558万円、収支差178万円。経常収入の減少額は33万円となっている。

世間より10年遅れのタイムラグ

全教会の経常収入と現住陪餐会員数で見た1990年以降の状況は、バブル崩壊後もほぼ10年間経常収入は伸び続けており、教団教会は世間一般に対して10年遅れのタイムラグがあるという見方を裏付けた形となっている。経常収入の最高値のピーク

を示した2002年に比例した形で現住陪餐会員数も減り続け、この傾向は9年目になる。この10年遅れ説を採れば、この傾向は今後も引き続き10年間は継続すると予測している。

現住陪餐会員数は、全国平均で5・4%の減少率で、平均を超えている教区は17教区中、奥羽、東北、東京、京都、大阪、東中国、西中国、四国、九州、沖縄の10教区。経常収入減少率の全国平均は4・3%で、平均を超えている教区は奥羽、東北、京都、大阪、兵庫、東中国、四国、九州、沖縄の9区となっている。教団教会の財政力の減退が現住陪餐会員数の減少に大きく原因していることが裏付けられた。

クリスチャン人口は0・074%

現住陪餐会員数の教団統計は1948年（昭和23年）からで、翌年の1949年の12万1844人がピーク。2007年現在では9万4709人と、2万7135人も減少している。予測関数で将来予測をすると、2020年にはさらに減少して8万5961人となり、8748人も減少することが予測されている。現住陪餐会員数がピークだった1949年当時の日本の総人口は8177万3000人で、現在の現住陪餐会員の対人口比では0・149%、2007年は0・074%となる。クリスチャン人口1%弱というのが一般の認識とされている中で、教団の現住陪餐会員でみれば対人口比は0・074%と認識し直す必要がある。

現住と別帳の数字が逆転する日も

現住陪餐会員に、原則として3年以上礼

拝出席ゼロ、音信不通などと規定（各教会によって異なる）された別帳会員数を重ねてみると何が見えてくるか。2007年現在の現住陪餐会員9万4709人に対して別帳会員数は6万4483人。そう遠くないうちにこの数字が逆転する日が来るような予感さえするというのは杞憂だろうか。外部に対する伝道以上に内部固めともいえる内輪の会員に対する信仰的面倒見の良さが求められているといえないか。

一般人口に対する現住陪餐会員の比率をみると、大都市圏ではかろうじて0・1%。これは1000人に1人ということだから、比喩的に表現すれば2000人規模のコンサートで自分たち夫婦以外はクリスチャンは誰もいないという勘定になる。

信徒の63%が60歳以上

次に教団信徒の年齢構成を見てみよう。教団内に信徒の年齢構成を示す資料がなかったため、はっきりしている受洗者を抽出した独自推計での暫定統計によると、教団教会の信徒の63%が60歳以上という結果が出た。全国一般65歳以上の年齢構成20・1%と比較すると、通常言われている日本社会一般の高齢化とはまるっきり異なる教団独特の構造となっていることが分かる。

現住陪餐会員数を増やす原動力となっている受洗者の統計をみると、終戦3年後の1948年の受洗者は1万1386人で、1952年の1万5765人がピーク。それが下がっては反騰するという繰り返しがしばらく続き、1968年の下落と時には反騰する力を失い、1971年には決定的となる。受洗者低迷の40年を過ごしてい

る。急落した1968年は歴史的には教団紛争が始まったときと一致する。しかし、その後の動きをみても急落の原因が解消されたことを示す兆候はどこにも表れないで現在に至っている。

受洗の下落と一致して1967年をピークに現住陪餐会員も急激に落ち、1968年からの8年間で1万2025人も信徒が教会を離れたことを示している。実にマイナス11・3%の激減である。2007年では、1年間に各教会の受洗者の数は平均0・8人、1人にも満たない。1967年当時の1教会当たりの全国平均が3・9人であったことを考えると惨憺たる状況に陥っていると言えまいか。

また、受洗者数が2007年で1424人に対し、推定・召天者数は2586人で、差し引き1162人のマイナスを示している。実際には召天者数は現住陪餐会員だけでなく、不在や別帳からも数字としては消えていくため、いずれにしても毎年これだけのマイナスが続く、受洗が召天に追いつけないという深刻な状況が到来したことを示している

各教会の受洗状況はどうか。年間の受洗傾向を東京教区を例に1990年から2007年までの18年間の平均で見よう。

半数の教会が受洗者年間ゼロ

年間に1人以上の受洗がある教会は126教会。同じく1人も受洗者がいないのが114教会。その内訳は、年間10人以上が4教会、5人～9人が16教会、3人～4人が41教会、1人～2人が65教会となっている。次に2年～3年に1人の受洗者が与えられるのが78教会、4年～5年

の間に1人の受洗は16教会、6年～10年に1人は20教会となっている。首都圏である東京教区でも1年に1人以上の受洗者が与えられる教会は半数であること、後の半数の教会は1年に1人も受洗者が与えられないという実態が浮かび上がってくる。他教区ではもっとその深刻さは懸念される状況ではないかと推測される。

次に教会（日曜）学校を見てみよう。1950年（昭和25年）当時で12万1538人だったのが2005年になると、1万9383人と変動率はなんとマイナス84・05%と目を覆いたくなるような悲惨な数字となっている。けた違いの落ち込みだ。1974年までようやく持ちこたえた7万4229人を最後に急落していく。伝道力低下が始まって数年後のことである。

これを教区別にみると、その多くは1教会平均10人を割っている。全国平均出席数は1970年で50人だったのが2000年14人、2007年11人となっている。これは1000人に1人の子どもしか教会に招いていない。小学校に限れば400人に1人しか招いていないということになる。これでいいのか。

伝道力の低迷という根深い問題

激減の理由として考えられるのは、少子化はもとより学校教育の在り方と子どもの生活状況の変化。それに伝道力の低迷という根深い問題の影響が教会学校に如実に現れていると見て取れると教団は分析している。

「ああー、もういい加減にしてくれ！」
「ネガティブな暗い話の羅列はうんざりだ」、「もっと明るいポジティブな話題はな

いのか」と、これを読み進んでいる読者の怒りの声が聞こえてきそうだ。「いや、あるのですよ」。それは「カトリック教会の動きだ」。そう、これをほん投げないで、もう少し辛抱強く読み続けて下さいな。

カトリックは教団の5倍の伸び

1948年当時の教団の現住陪餐会員数10万6677人、同じくカトリック11万1209人で、ほぼ同数だった。それが60年を経て2007年にはカトリックは教団の5倍の伸びを示しているのだ。時が良くても悪くても、着実に教勢をのぼしたところと、そうでないところの違いが明瞭に現れている。

教団とカトリックの受洗に関しては1994年から2006年のデータ比較だ。幼児洗礼は教団にもあるが、統計上割愛してある。この比較では教団の幼児洗礼は120人だが、カトリックの幼児洗礼は3501人と30倍の開きがある。この幼児洗礼は注目されるところで、カトリックとプロテスタントの違いが大きく現れていると見ることができる。

教区別では、カトリックの受洗者7193人は幼児3501人と成人3692人の合計数で、堅信礼はこのほかに4790人。教団の方は幼児洗礼120人、成人1424人の合計1544人となっている。

カトリックは東京教区だけで教団全教会の受洗者数をはるかに超えている。ちなみに教団の343人に対してカトリックの受洗者は1842人と5倍を超える実績だ。

教団とカトリックの大きな違いが非常に特徴的に現れているのが教団の別帳会員と同様の扱いに、カトリックでいう「居所不

明」「いどころ不明」という項目だ。

カトリック信徒数44万4045人に対し、居所不明は3万1557人で、対信徒数比率は7・1%。教団では、現住陪餐会員9万4709人に対して別帳会員は6万4483人で、同68・1%にもなる。7・1%と68・1%の差は何を意味しているか。信徒への面倒見の良さ、ケア力の違いではないのか。見過ごせない数字だ。ここにもヒントが…。

カトリック中央協議会のイヤブックスの用語説明欄を見ると、「居所不明は信徒台帳に記載されているが、ある期間手を尽くし、捜しても連絡の取れなかった信徒の合計人数」とある。まるでマタイによる福音書18章12節が目につく。「99匹を山に残しておいて、迷い出た1匹を捜しに行かないだろうか」

新たな別帳を生み出さない関わり

教団ではどんな記述になっているか。教団の教規第140条では「信徒が次の各号の一つに該当するときは、役員会の議決を経て、別帳会員に移すことができる」と規定し、「①3年以上住所が不明であるとき②理由がなく3年以上教会に出席せず、かつ献金その他の義務を怠ったとき」とある。この二つの記述の違いは「教会に対する信徒の関わり方」というよりも「信徒に対する教会の関わり方」の基本的な違いの表れと言えるのかも知れない。「少なくとも私たちは新たな別帳を生み出さない関わりが第一歩。次に何をなすべきか。このカトリックの記述はヒントになる」と指摘している。

日本基督教団埼玉地区教会教勢一覧（信徒の友・日毎の糧＝2000/9-11、2005/5-8、2009/12-10/2から）

	創立年	現住陪餐会員			礼拝出席			聖研 祈禱会			予 算			CS出席		
		2009	2005	2000	2009	2005	2000	2009	2005	2000	2009	2005	2000	2009	2005	2000
久美愛教会	1927	54	57	59	65	58	43	4			321	677	599			
浦和別所教会	1934	37	40	34	32	35	28	11	6	6	934	837	728	7	6	9
浦和東教会	1960	92	102	102	61	64	75	13	14	17	1271	1431	1443	15	17	22
大宮教会	1903	261	237	216	186	172	160	27	28	25	3240	3094	3161	112	168	79
東大宮教会	1971	90	92	96	59	68	64	16	19	17	1306	1239	1185	31	37	35
七里教会	1987	20	28	21	25	19	14	6	5	5	475	548	273	7	7	4
埼玉新生教会	1946	96	70	74	73	67	63	10	15	8	1750	1500	1389	99	88	80
埼大通り教会	1971	41	37	29	33	29	27	5	9	9	870	747	740	10	9	7
岩槻教会	1889	121	143	126	60	75	68	13	17	13	1072	1181	1406	12	45	28
春日部教会	1896	121	107	121	74	64	59	7	6	6	1360	1164	1237	13	18	16
越谷教会	1889		208	205		111	109		9	12		1576	1415		185	211
シャロンのばら 伝道所	1992	56	53	44	62	54	54				814	691	814		22	21
草加教会	1956	24	31		26	35		15	15		356	405	406	10	22	
東京聖書学校 吉川教会	1994	71	56	40	54	43	38	18	21	20	830	603	540	9	14	14
川口教会	1926	86	82	69	41	42	32	6	9	7	826	741	645	23	25	34
西川口教会	1950	88	107	108	71	91	70	11	12	18	1342	1519	1607	13	16	51
安行教会	1964	32	35	29	35	34	29	12	12	11	675	609	646	5	4	
上尾合同教会	1960	140	129	118	108	100	80	26	21	20	2091	1817	1718	79	65	52
埼玉中国語 礼拝伝道所	2001	18	10		31	30		18	12		186	236				
西上尾教会	1971	23	30	33	13	11	15	12	11	12	337	336	461			3
日野原記念 上尾栄光教会	1963	18	15	9	12	12	6	12	12	5	236	270	303		3	2
上尾使徒教会	1970	43		49	27		20	7		5	500		451	3		3
聖学院教会	1976	51	45	42	77	59	50	8	6		800	690	700	65	58	53
白岡伝道所	1985	7		5	10		9	3		5	208		163			9
川越教会	1890	38	43	43	29	29	23	5	6	6	700	723	607	4		1
初雁教会	1932	93	91	104	58	59	61	15	12	12	1254	1280	1490	10	33	26
坂戸いずみ教会	1992	46	33	24	44	31	21	12	13	9	852	676	568	18	24	6

鳩山伝道所	1991	13	10	10	8	7	9	3	3	4	169	147	146	3	3	4
志木教会	1945	98	101	107	70	20	61	13	14	12	1123	1120	1325	29	37	32
埼玉和光教会	1947	176	167	147	104	102	78	20	23	13	1665	1885	1797	149	148	78
朝霞教会	1950		10	7		11	10					238	270		2	5
武蔵豊岡教会	1889	118	124	128	73	67	76	19	11	7	1290	1093	1293	8	12	9
飯能教会	1947	39	35	32	33	28	28	8	6	6	675	630	632	4	2	8
小川教会	1896	39	34	33	27	25	23	7	5	4	812	710	636	5	12	6
東松山教会	1956	30	50	47	18	32	31	9	8	7	738	912	740	5		4
越生教会	1949	12	14	15	12	10	12	5	4	3	260	230	262			
毛呂教会	1893	40	49	47	25	30	31	5	6	7	549	574	687	30	20	14
三芳教会	1972	19	22	20	17	18	20	4	4	5	478	453	413	6	11	5
所沢武蔵野教会	1969	77	96	113	50	61	61	9	11	8	1191	1256	1375	8	10	13
所沢みくに教会	1970	44	39	25	32	29	21	6	5	3	723	718	452	9	10	3
東所沢教会	1986	77	75	67	42	50	49	10	5	13	1164	1261	1494	16	17	12
ベウラ教会	1959	47	47	45	21	22	23	7	7	7	819	828	708		4	
狭山伝道所	1989	17	14	19	18	15	17	12	6	14	296	280	363	2	4	
熊谷教会	1885	73	80	75	47	48	53	11	12	16	1000	1083	1048	8	30	61
行田教会	1941	15	21	29	11	20	20	3		2	228	248	331	10	30	76
愛泉教会	1947	62		63	52		36	6		4	766		712	77		39
加須教会	1947	12	15	14	13	9	8				226	187	213			
北川辺伝道所	1992	9	8	5	9	7	5	9	6	4	142	119	125			
菖蒲教会	1949			6			5			3			89			2
和戸教会	1878	38	48	45	27	27	22	10	7	5	732	637	660	2	1	2
鴻巣教会	1920	30	33	40	31	28	26	5	7	6	672	648	577	12	13	7
深谷教会	1916	115	105	104	69	64	67	8	6	12	1779	2207	2040	11	19	11
深谷西島教会	1928	27	28	5	26	21	9	7	6	3	417	532	466	5	8	4
本庄教会	1888	35	35	39	24	28	25	3	4	4	566	545	585	2	4	5
本庄旭教会	1919	16	19	16	14	9	7				201	217	232			
秩父教会	1908	46	46	52	25	23	25	5	8	7	577	515	538	4	1	8
北本教会	1971	28	24	22	23	22	14	9	11	7	505	537	475	5	3	5
羽生伝道所	1986	4		5	4		7				108		147			
桶川伝道所	1991	11	8	8	10	8	14	3	3	8	218	166	186	2	9	3

埼玉地区壮年部こうえん会—笑いと感動—

2008年11月16日(日) 14時30分～17時 日本基督教団大宮教会礼拝堂

【落語】

古琴亭 志ん軽さん

(代々木上原教会員)

福音噺「めめんともり」

「石打ち」

「皆さん、おめ様方 しゃべってらことよぐわがる。たすかにモーセ様の掟さ従えば、このおなごは石打ちということになるだども、その前に、わの言うこと一つ聞いてけれ。誰でもみんな、天のおとじゃである神様に対して何の罪咎(とが)もねえ そう思う人がらこのおなごの人さ 石投げればいいんでねえべか」

いきなり、津軽弁で落語の口上。新約聖書ヨハネによる福音書8章1節以下に記された「姦通の女」の場面の一席。律法学者やファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れてきて、「こういう女は石で打ち殺せとモーセは律法で命じている、イエスはどう思うか」との民衆の声に、イエス様が答えた言葉の落語調的翻訳だ。青森県弘前市出身のお国言葉で語る古琴亭 志ん軽さん。本名、齋藤 和夫さん。49歳。大手電機メーカーの研究所に勤務する管理職で、理学博士。専門は超伝導エレクトロニクス。群馬大学の客員教授も務める理系人間だ。日本基督教団代々木上原教会員で、東京都小平市に住む。夫人と一男一女の4人家族。若いころから落語が好きで、特に古今亭 志ん生にのめり込む。志ん生師匠のテープを繰り返し聴いたというが、あくまで落語は独学。実際に手ほどきを受けた師匠はいない。あちこちの寄席に入り浸っては口上の業を盗んだ。素人落語(噺)家を自称する。かつて三鷹教会の牧師からクリスマスに落語を演じてほしいというリクエストに応じて以来、好評につき全国各地の教会からお声が掛かるとどこへでも飛んでいく。「年中行事」となった埼玉新生教会の新年祝賀寄席のお馴染みの顔でもある。

「熊さん、八つつあん」が登場する「長屋もの」、「やせがまん」が題材の「強情灸(ごうじょうきゅう)」、酒を止めようとして止められない噺の「親子酒」といった古典落語はもとより、何と言っても聖書の物語を題材にした創作落語を得意とする。

大宮教会礼拝堂の講壇に畳を敷いて設えた特設寄席。座布団の上というミニスペースながらも、和服姿で扇子を自在に使い、体をくねらせ、伸び上がり、うずくまる全身で表現するダイナミックな仕草に感嘆する。口八丁、手八丁とはこの事。口演のカセットテープでの録音が許可されなかったため、口上の詳細をお伝えできないのが残念。

福音噺「石打ち」に先だって演じられた御題は、37歳の時に体験した自らの交通事故を題材にしたラテン語で「汝の死を思え」を意味する「めめんともり」。このほか、「放蕩息子」「ていべりあす湖畔」「きりしとほろ上人伝」(芥川龍之介)、「駆け込み訴え」(太宰治)などの創作落語がある。

埼玉地区壮年部こうえん会—笑いと感動—

2008年11月16日(日) 14時30分～17時 日本基督教団大宮教会礼拝堂

【詩吟】

豊川 耕颯さん

(耕象流師範、越谷教会員)

西郷 南州作 「失題」

讚美歌「いつくしみふかき」

本名、豊川 昭夫さんと言えば、埼玉地区の各個教会の人にとっては毎度お馴染みの顔。地区委員であり地区の教会運営の重責を担って八面六臂でご活躍の越谷教会の役員。株式会社豊川樹脂の代表取締役、プラスチック製品を製造する会社の社長さんだ。このお人が詩吟の名手とは。初めて知った方も多いのでは、オン年56歳。渋いお声が大宮教会の礼拝堂中に静かに響きわたる。

30歳の時、会社のお得意さんの詩吟の会の会長さんからお誘いがあったのがこの世界にはまり込むきっかけとなった。以来、西川口の詩吟教室に通い詰め、12年掛けて皆伝師範の免状を取得した。流派は耕象流正吟社。

主に吟ずる題目は、漢詩をはじめ、新体詩、俳句、短歌など多岐にわたる。豊川 耕颯さんの真骨頂は讚美歌を題材にした詩吟だ。十八番は讚美歌312番で知られる「いつくしみふかき」、讚美歌21だと493番「いつくしみ深い」。アメージンググレースも得意だ。特に讚美歌の節づけはお手本がないので暗中模索の中で、もがきながら一節一節の節を新たに探り出していく。聖書の詩編を口語訳にした詩吟にも挑戦している。

今回の口演では、詩吟をうなる合間に証を交えてのトーク調で進められたが、あまり話しを長くすると詩吟をうなる上で息切れをきたしてしまうという。

詩吟の「失題」(西郷南州作) 口上を参考までに次に記す。

「我に千絲(せんし)の髪あり 麩麩(さんさん)として漆よりも黒し
我に一寸の心有り 皓皓(こうこう)として雪よりも白し
我が髪は猶断つべし 我が心は截(き)るべからず」

【大意 私には千筋の髪の毛がある。ふさふさとして、漆よりも黒い。一方、私には一寸の心がある。白く輝いて雪よりも白い。私の髪の毛は断つこともできるであろう。しかし、私の心(志)は何物も断ち切ることはできない】

地区壮年部の最近12年間の講演会等活動内容は次の通り。

1998年

- 2月22日 大宮教会 高齢者問題懇談会 「高齢化社会とキリスト者の役割」
講師：河 幹夫厚生省社会局施設人材課長（同盟基督教団和泉福音教会員）
- 9月23日 県民活動センター 一泊修養会 ～24日（伊奈町）「人生の秋を豊かに」―聖書における老いの意味―
講師：最上 光宏浦和東教会牧師
信徒発題「信仰の継承」抜井 太郎壮年部委員（志木教会員）
- 11月15日 大宮教会 信徒修養会「会堂建築を成功させるには」信徒発題：松下 充孝大宮教会員
「信仰継承の成果をあげるには」信徒発題：上松 寛茂上尾合同教会員

1999年

- 2月21日 大宮教会 「いと小さき者の一人に」講師：天羽 道子かにた婦人の村施設長（千葉県館山市大賀）
- 6月20日 大宮教会 「伝道へ一礼拝からの出発」講師：小島 誠志日本基督教団総会議長、松山番町教会牧師

2000年

- 10月29日 大宮教会 「高齢社会と生きがい」講師：山崎 美貴子明治学院大学副学長

2001年

- 5月27日 大宮教会 「ひとにぎりの土」講師：小澤 貞雄秋津教会牧師（多摩全生園）
- 10月14日 各ブロック 「魅力ある教会づくり」（信仰の継承と教会員の高齢化）各壮年会員によるシンポジウム

2002年

- 5月26日 大宮教会 「自由において共に生きよう」講師：関田 寛雄青山学院大学名誉教授

2003年

- 9月14日 大宮教会 「老いを生きる」講師：阿部 志郎横須賀基督教社会館長、神奈川県立保健福祉大学長

2004年

- 5月16日 大宮教会 「聖霊の息吹を受けて」―信仰の継承を願って― 講師：大宮 溥日本聖書協会理事長、
成瀬が丘教会牧師、阿佐ヶ谷教会名誉牧師

2005年

- 7月17日 大宮教会 「認知症の正しい理解―心のケアと信仰―」
講師：長谷川 和夫認知症介護研究・研修東京センター長
聖マリアンナ医科大学名誉教授、銀座教会員
- 9月23日 大宮市民会館 1日修養会「共に学び、共に考えよう～教会の成長～」講師：疋田 國磨呂大宮教会牧師

2006年

- 7月30日 大宮教会 「老いをどう生きるか～希望を支える信仰と老後～」

2007年

- 講師：児島 康夫川越キングス・ガーデン施設長日本ホーリネス教団川越のぞみ教会員
- 9月17日 大宮教会 1日修養会「教会の成長と活性化」講師：疋田 國磨呂大宮教会牧師
- 11月25日 埼玉新生教会「国籍は天に」～特別養護老人ホーム・スマイルハウスのターミナルケアの試み～
講師：仲矢 杏子スマイルハウス施設長

2008年

- 6月29日 大宮教会 「共に生きる教会生活～ボンヘッファーの真実な交わり～」
講師：疋田 國麿呂大宮教会牧師 出席：13教会 60人
- 11月16日 大宮教会 福音落語「めめんともり・石打ち」出演：古琴亭 志ん軽（本名・齋藤 和夫氏）
代々木上原教会員
詩吟「西郷 南州・いつくしみ深き」出演：豊川 耕颯（本名・豊川 昭夫氏）
越谷教会員 出席：14教会 66人

2009年

- 7月19日 大宮教会 修養会 出席16教会70名
主題「これでいいのか？今の教会」～データから10年先の姿を観る～
(資料 教団50年データ分析と提言 制作：教団予算委員会 CD-ROM 映写)
講師 大宮教会 疋田國麿呂牧師 司会 荻田久次郎兄（越谷教会）
- 11月29日(日) 大宮教会 講演会 出席12教会71名
主題「四世代が喜び集う教会形成」～高座教会の取り組み～
講師 カンバーランド長老キリスト教会 高座教会 松本雅弘牧師
司会 島崎光雄兄（武蔵豊岡教会）

定期総会・委員会の開催

2008年

2月2日（大宮教会）＝三役会、2月17日（大宮教会）＝総会、委員会、3月9日（浦和東教会）、4月21日（大宮教会）、5月25日（武蔵豊岡教会）、7月27日（和戸教会）、9月28日（越谷教会）、11月16日（大宮教会）

2009年

1月25日（大宮教会）、2月15日（岩槻教会）＝総会、委員会、3月15日（上尾合同教会）、4月25日（大宮教会）、5月24日（埼玉和光教会）、9月3日（大宮教会）、9月27日（越谷教会） 2010年1月24日（西川口教会）

2009年度委員会組織

- 委員長 松下充孝(大宮) 書記 島崎光雄(武蔵豊岡) 会計 田島章義(春日部)
委員 阿部孝司(上尾合同) 和泉雄寿(和戸) 岩井田慎二(埼玉和光) 荻田久次郎(越谷) 柏田 實(西川口) 高橋幸好(浦和東) 樋口道成(岩槻)
協力委員 上松寛茂(上尾合同)
地区委員 壮年部担当 石川幸男(大宮)

日本基督教団関東教区
埼玉地区壮年部機関紙 「埼玉・教会・壮年」
NO. 8・9合併号 2010年2月28日発行
発行人：松下 充孝 編集人：上松 寛茂